

## 世界は地元でできている

— 翻訳文学のすすめ —

法学部 准教授 中村 和恵

アメリカ中西部の地方都市にいたときのことだ。カリブ海の島国トリニダード・トバゴの首都ポート・オブ・スペインへ行く予定を立て、ホテルに電話をかけた。国籍を問われたので日本と答えると、ジャパどこか？ とさらに聞かれる。どういうこと？ とおもいながらトウキョウ、という、相手はだからそれはどこか、と聞き返してくる。戸惑っていると、わたしが聞いているのはあー、と特徴のある、英語の関西弁とでも呼びたい音楽的なカリブ海のアクセントで、受付の女性は説明してくれた。ニホンでどこにあるのかってことよ。中近東か、東アジアか？

じっくり考えればこれはべつに驚くほどのことではない。講義で何度か白い紙を配って、「ここにいま世界地図を描いてみて」といってみたことがある。かなり正確なものもあったが、アラビア半島どころかアフリカさえないものも、日本の左右にぼん、ぼんと四角が二つ描いてあるだけのものもあった。そしてほぼすべての地図が見事に、ほかに比べ圧倒的に大きく詳細に描かれたニホンを中心にしていた。留学生が描いた地図に日本がなかったこともあったけれど。いや、そうしたものだ。わたしは英語で書かれた世界各国の文学に関心があるので、かつて大英帝国の植民地であったところを中心にカリブ海やオセアニアなどを訪れるのだが、わたしを含め世界のひとはみんな、それぞれの地元をでっかく中心に描いた地図をあたまに入れて、飛行機に乗りこむのだとおもう。

いま、翻訳書が、なかでも翻訳小説が、なかなか売れないという。外国語が苦手で喋る機会もないし、日本の外のことにはなかなか興味がわかないという人が、以前より多いらしい。飛行機がタワーにつっこんでいく9・11の映像をテレビが何度も何度も繰り返していた頃、「ひとごとにはしかおもえない、リアルじゃない」といった学生は、多分ほかの多くの学生よりすこしばかり正直だったのだろう。でもこのニホンという国と、そこで暮らしているわたしたちもまた、よそから見たらきわめて「リアルじゃない」らしいのだ。トウキョウではニンポーを駆使するハイテク・ゲイシャが高層ビルを飛び回りアニメで世界征服を夢みている、みたいなファンタスティックなイメージしかもっていない人はたくさんいる。だけれどもわたしたちは確かにここに生きているわけで、9・11の映像が流れるたびパニックした声で「カミカゼ、カミカゼ」といっているのが聞こえたり、その日アメリカの高校では日本人学生に冷たくするひともちたりすると、もうすこし自分たちのことをわかってもらいたいとおもったりもするわけで、それはお互いさま、なんだとしたら、やっぱり、歩み寄るしかない。じつは

それには、読むしかないのである。行く前に読み、行ってから読む。行かなくても読む。お互いについて。世界について。

でも、あまりになにも知らない、なにからどうしたら、というひとには、物語を読んでほしい。専攻は関係ない。フィクションでもノンフィクションでもいい。フィクションだから事実を伝えていないなんてことは、じつはない。でも専門分野の研究書とか資格の取りかたならわかるけれど、小説みたいなものを読んでなにかいいことがあるのか？ あるのだ。すぐれた物語は人生に直接効く。嘘じゃないです。物語とは、この世界のあらゆる不可解を、理不尽を、驚異を理解するためにわたしたちが太古の昔から編み出してきた方法なのだから。

難民キャンプの暮らしは豊かさに慣れた者には想像しがたい。爆撃や飢餓についての報道もわたしたちの知る現実とはかけ離れたものにみえる。アフリカやアジア各地からやってきた労働者や学生が、アメリカやイギリスで、あるいは日本でどんな思いをしているかなんて、たいていの人は考えることもすくない。だから作家はひとりの人についての物語を書くのだ。テレビのインタビューなどでははけって語られない、ほんとうの話を。マスメディアでは内紛といったことばひとつで片づけられてしまいがちな、人々の日常と暮らしの細部を。物語だからこそ、それができるのだ。そうして、わたしたちがそれを読むうちに、じつは外国のことであるということとはもはや、関係がなくなってくる。弱かったり、滑稽だったり、迷ったりする自分についての話として、状況はまるで違うのに、考えている自分に気づく。たとえば最近のもので、C・N・アディーチェ『アメリカにいる、きみ』。ナイジェリア出身の若い女性が書いた短篇小説集だ。それから、ちょっと古い本なので図書館に行って、パレスチナ難民についてのガッサン・カナファーニーの物語、『太陽の男たち・ハイファに戻って』。アミタヴ・ゴシュ。ジャマイカ・キンケイド。それから……

カーニバルの終わったポート・オブ・スペインへ向かう飛行機は、帰省する学生や家族連れなど、地元のひとたちがほとんどだった。機内には嗅ぎ慣れない匂いがした。世界は地元でできている。壮大な知の帝国がもはや信じられなくなっただけ、そういう感覚を伝えるものをこそ読みたいし、書きたい。

NAKAMURA  
Kazue



**職** 業柄、書物に囲まれて生活している。これ以上増えても置き場に困るのだが、書店に並んだ本を手にとり、もしかしたら今後読むかもしれない、そのときに買える保証はない、品切・絶版になる書物も多い、出版不況の折少しでも出版社・書店に貢献したい、そう思うとつい買ってしまふ。だがすぐに読むわけではないので、そのまま死蔵されるものも多い。きちんと書架に並べることは物理的に不可能で、棚に2重に並べ、文庫・新書は3重に、おさまりきれないものはあちらに積み上げ、こちらに積み上げ、それで前に買ったのを忘れて2冊目を買うこともままある。せめてもの予防策として、買った本の著者名、書名をパソコンに入力することにしているが、それでも管理把握は容易ではない。このあいだも、わざわざ別の研究機関で手続をとって見せてもらった本が、何のことはない、自宅の書棚の奥から出てきたことがあった。これは思い出せば、台湾に出かけてまとめて購入し船便で送ってもらったものの一冊で、現物を目にするまでまったくその存在は念頭になかった。海外に行くと、現地価格で安く買えるし、またいつ来られるともかぎらないので、やみくもにやたらと買いこんでしまい、船便で日本に到着する頃には何を買ったか覚えていないことが多い。

学生の頃から、とにかく本を買え、と先生にも先輩にも言われ、言われるままにその価値も理解しないまま、とにかく本を買った。中国の古い文献を読むことをしごととしているが、どの時代を研究するにせよ、みな古典を踏まえて書かれているので、基本的な典籍は手元にあった方がよい。また当然、工具書と呼ばれる辞書のたぐいも揃えなければならない。『十三経注疏』、十三経清人注疏のシリーズ、『史記』、『漢書』ほか正史類、『二十五史補編』、新編諸子集成のシリーズ、『文選』、『太平御覧』などの類書、これらを当時手に入るだけ買い求めたのは学部生の頃だったろうか。出典・用例調べの有力なツールとして『佩文韻府』を使っていたが、図書館の参考室で見るほかなかったそれを自分で買ったときには、これで自宅で夜通し演習の準備ができると悦に入ったものだった。小さな本であるが、先生が授業中に薦めていた『四庫全書簡明目錄』や『簡明古漢語詞典』を専門の書店でようやく見つけたときも、まるで自分の学力が飛躍的に高まるかのように錯覚して、小躍りしたいくらいにうれしかった。もちろん錯覚は錯覚であったが。段玉裁『説文解字注』、『経籍纂詁』、学生時代に買ったこれらの工具書は、今でも一番手近なところに置いて重宝している。『漢語大詞典』は大学院生のとき、当時中国に留学していた先輩が、後輩たちのために何セットも買って送ってくれたうちの1セットを、必要経費プラスアルファを支払って入手した。だが学部時代からの習い

で、まず最初に諸橋『大漢和』ではなく『辞源』を引け、という先生の教えを墨守し、今でも『漢語大詞典』ではなく、最初に『辞源』から引く。『辞源』には、4冊本と字の小さな1冊合訂本があり、4冊本用には『辞源修訂本索引』という本がある。1冊本の末尾にも索引がついているのだが、これが引きにくく、4冊本用の索引で調べたい語が載っているかを確認し、1冊本を引くという一見面倒なことをしていた。当然ページ数が違うので、採録されていることを確認した後は、1冊本巻末の索引でページ数を調べ直す。ある時から引いた文字とその前後の文字について、1冊本のページ数を4冊本用の索引に転記すると、次回以降手間が省けるというので、辞書を引くたびに些少の労をいとわず書き写しはじめた。今ではおおよそ半分以上の字について対応がなされており、『辞源』を手放せない理由の一つになっている。

学生時代の下宿さがしは、本が置ける広い間取りが絶対の条件であり、風呂があるかないかはどうでもよかった。学部の3年から修士課程までの4年間は銭湯に通っていた。

「書痴」ということばがある。本が好きで好きでたまらず、その程度がおおよそ常軌を逸している人のことを言う。特に文学部に籍を置いていると、周りは「書痴」でいっぱい、私などはまだまだ「書痴」を名乗る資格がない。『辞源』では「書痴」を現代中国語で「書呆子」と言い換えており、こちらは「本の虫」と言ったところで、古代漢語のもつ狂気の一步手前のような近寄りがたさは失せているように思う。ことば自体のニュアンスは変わらないのかもしれないが、歴代の錚々たる「書痴」の逸話が、古漢語に重みを与えているのだろう。「書呆子」は机上の空論に終始して世事に疎い人をばかにするときにも使う。「書痴」も同様の使い方がされていたようである。世事に疎いということだけで言えば、それは私にぴったりである。

最後に図書館について。使い勝手のよい資料の揃った図書館があれば、自分で本を買わなくてもよいと思う人がいるかもしれないが、私にとって図書館は、書店以上に購買欲をそそる魔物である。きちんと分類配架され、ずらりと関連書が並ぶ図書館の棚は垂涎的であり、本を借りた直後にやはり自分で持っておきたいと、借りた本はほとんど読まないままに、書店に発注することもままある。ただどうしても手に入らない本、手に入るが分量が多すぎて自宅・研究室に収まりきれない本、これは本当にありがたい。

SHINO  
Yoshinobu

